

日本キリスト教会大阪北教会

正午礼拝

2005年01月12日

『あなたたち偽善者は不幸だ』

聖書 マタイによる福音書 23 章 29～36 節 賛美歌 497 300

説教 森田幸男牧師

今日の箇所は壮大な殉教の歴史を踏まえて語られています。「殉教」というのは、自分の信じる宗教、神のために命を捨てること、これを「殉教」と言います。その時代の大勢、大方のものの考え方、信仰のあり方、それらに受け入れられなくて犠牲になること、殺されること、そういうことを「殉教」と言うわけですが、そういう殉教の歴史を踏まえて今日の箇所は語られております。それを今、順次に見ていきたいと思っております。

29 節と 30 節をもう一度読みます。「律法学者とファリサイ派の人々、あなたたち偽善者は不幸だ。預言者の墓を建てたり、正しい人の記念碑を飾ったりしているからだ。そして、『もし先祖の時代に生きていても、預言者の血を流す側にはつかなかったであろう』などと言う。」このようにあります。律法学者やファリサイ派の人たちは、過去の預言者や正しい人、つまり義人、殉教者のことを指しますが、そういう人の墓を建てたり、記念碑を建てたりして、その人の殉教の日には記念祭を行っていたことがうかがえます。そしてそのような記念祭を行うということは、その殉教者の信仰を覚えるということでありましてけれども、もし自分たちがその殉教した人たちの先祖の時代に生きていれば、そのように預言者を迫害し殺すという者の側に立たないで、むしろ迫害し、殺すことを阻止する側に立って戦ったであろうと、そういうふうに律法学者やファリサイ派の人々は過去の過ち、愚行を嘆いて、そして今の時代において本当に神を信じ、神の御心に適う道を歩もうという決意を新たにす、それが殉教した預言者や義人を祭ることの意味だと思ふのです。そういうことを彼らはしていたわけがあります。

次に 34 節を見ますと、彼らは一方でそのような過去の預言者、義人を記念すると共に、また他方では 34 節にあるようなことをするわけです。「わたしは預言者、知者、学者をあなたたちに遣わすが、あなたたちはその中のある者を殺し、十字架につけ、ある者を会堂で鞭打ち、町から町へと追い回して迫害する。」これはイエス様の在世当

時の事として語られているのであります。私たちはこのような表現を読むと、パウロが熱心なユダヤ教徒であった時代にクリスチャンを迫害したその時のことなども思い起こします。パウロがユダヤ教徒としてクリスチャンを迫害した時代というのは、イエス様が亡くなられて後のことですが、このマタイによる福音書が書かれた時代というのは紀元七十年代と言われていますが、この福音書が書かれた時代においてもここに書かれてあるような事があった。つまり預言者、知者、学者というのは教会の奉仕者を指すわけですが、そういう人たちが殺され、十字架につけられ、会堂で鞭打たれ、町から町へと追い回されて迫害を受けるというような事が、イエス様の当時にあり、そしてパウロの時代にあり、またこの福音書が書かれた時代にあったということであります。

先ほど読みましたように 30 節で、律法学者やファリサイ派の人たちは、「もし先祖の時代に生きていたら、預言者の血を流す側につかなかったであろう」と言っているわけですが、もしそれが本当にそうであるならば、今の時代においてイエス様が遣わされる預言者、知者、学者たちを迫害するはずはなく、むしろその語ることに耳を傾けるはずです。実際彼らはそのように言いつつも、していることはその反対のことをしているのです。それでイエス様はこう言われるわけであります。31～33 節、「自分が預言者を殺した者たちの子孫であることを、自ら証明している。先祖が始めた悪事の仕上げをしたらどうだ。蛇よ、蝮の子らよ、どうしてあなたたちは地獄の罰を免れることができようか。」このようにとても厳しいことを言っておられます。「今あなたたちがしていることは、あなたたちの先祖が預言者や義人を殺したそれと同じ事をしているのだ。その悪事の仕上げをしたらどうだ。蛇よ、蝮の子らよ、どうしてあなたたちは地獄の罰を免れることができようか。」このようにとても厳しく地獄の罰を免れないと言っておられるのであります。

「地獄の罰を受ける」というのはどういうことかと思うのですが、例えば先ほど触れたことですが、パウロが町から町へキリスト者を迫害して回りました。けれども彼はそれが間違いなのだ気付かされたわけです。その時彼は飲むことも食べることも出来ない、そして目も見えなくなるほどの衝撃を受けました。真に神に仕える人、神に受け入れられる人を罪人として、律法違反者として殺すというような過ちを犯したわけですが、それはそれと自分では気が付かないで、むしろ自分が正しいことをしていると固く信じて、その結果多くの人を死に至らせるようなことをしてしまっただけです。そしてそれが本当に誤りであったと気が付いた時のパウロは、正に地獄の苦しみ

を味わったと思います。

今日の箇所で 35 節以下に書かれていることは、少し説明しないと分からないかもしれません。「こうして、正しい人アベルの血から、あなたたちが聖所と祭壇の間で殺したバラキアの子ゼカルヤの血に至るまで、地上に流された正しい人の血はすべて、あなたたちにふりかかってくる。」このようにあります。アベルというのは創世記 4 章に書かれてあることですが、アダムとエバの次男であります。長男はカインであります。二人とも神様に献げ物をするのですが、神様はアベルの献げ物に目を留められた。そこでカインはそのことに腹を立てて、弟アベルを殺したという話が出ております。そしてこのアベルは正しい人・義人と新約聖書のヘブライ人への手紙には出ております。これが聖書に記された最初の殺人であります。最初の犠牲者と言ってよいと思います。そして、「バラキアの子ゼカルヤの血」とあるのは、これは旧約聖書の歴代誌下 24 章に記されていることです。今の私たちの聖書は旧約聖書などもギリシャ語に訳された聖書の順序になっているのです。けれども旧約聖書は、元はイスラエルの言葉のヘブル語で書かれたものが原典です。そのヘブル語原典では歴代誌というのは旧約聖書の最後の書なのです。そこにゼカルヤの殉教のことが書かれているのです。ですからここに「アベルの血から、あなたたちが聖所と祭壇の間で殺したバラキアの子ゼカルヤの血に至るまで」というのは、最初の犠牲者と最後の犠牲者、この両者を踏まえているわけです。そしてその間にいろんな預言者、義人等の殉教があったわけです。それで、この表現で旧約聖書全体を踏まえていることになるわけです。初めに、「今日の箇所は壮大な殉教の歴史を踏まえて語られています」と申しましたのは、このことを指して言ったのであります。

このようにイエス様はここで語られる時には、旧約聖書におけるイザヤという預言者、エレミヤという預言者、そういう有名無名の世々の大小様々な犠牲者が数知れないほどいるのです。そういう人をイエス様の時代、律法学者、ファリサイ派の人たちは記念をして、本当にそこに神に仕える道があったのだ。それを自分たちの先祖は殺してしまったのだと、その事を悔いて、自分たちは本当に神に仕える道を歩もうと、これが預言者の墓を建て、義人の記念碑を飾ると言われていることです。そういうことをしながら、一方ではイエス様が遣わす預言者、知者、学者たちを迫害して殺し、十字架につけるといようなことをして、それが過ちであるということには全く気がつかないのです。

このマタイ福音書の 23 章を読み始めた時に、「偽善者」というのは「役者」のこと

だと申しました。それは役を演じているだけなのだ、信心深い振りをしているだけであって、その実際は信仰に生きていない者を「偽善者」と言うのだと申しました。しかしそれは必ずしも意識的に信心深い振りをすることだけではなくて、自分自身では本気で神様の御心に適う信仰の道に歩んでいるとそういうつもりでありながら、事実としては神様の御心に反することをやっているが、そのことを自覚できないでいる、そのような自己矛盾、それを「偽善」と言うのだと思います。

私たちもこの律法学者、ファリサイ派の人々と同じように、過去のことを聖書で読んで、自分たちもその時代に生きていたらこんな愚かなことはしない。大勢に流されなくて、本当に正しい者を正しいとするというふうな思いを持つことがあります。また、他人のことについては比較的確かな判断を持つこともできますのでありますが、しかし今この時代の中で本当に神の御心にそうすることが何であり、どう生きることが本当に神様の求め給うことなのかということを知って、しかもそれを実際に生きるということ、これは至難なことなのだとすることを、今日の箇所を読む時に思い知らされるのであります。律法学者やファリサイ派の面々、徹底的にイエス様からその偽善性を暴かれているこの人たち、これは決して他人事ではない。“あなたはどうか”ということ私たちが問われているということ強く思わせられるのであります。そしてそのような偽善の故に犠牲になっていった人々のことを振り返る時に、神を信じ、そして主イエスを信じ、その御後に従って生きるという信仰の道は、それは犠牲を伴う道であること、自分なりに十字架を負うて歩む道以外ではあり得ないことを、今日の聖書を通して示されるのであります。

ですから、私たちはこの聖書の御言葉に照らされて、自らの歩みがどうであったか、その徹底した自己吟味、自己反省を求められているのであります。またどの道に歩むことが本当に信仰の道なのか、そのことを真剣に考えねばならないのであります。

お祈りいたします。

聖なる、憐れみ深い、義なる御神。

今、聖書の御言葉を通して、わたし自身、私たち自身の信仰の歩みを問われていることを覚えます。どうか、もう一度あなたの前に顔を上げて自らを省み、御心にそう道へと少しでも進むことが出来るように導いてください。

この祈り、主イエス・キリストの御名を通し御前にお捧げいたします。アーメン